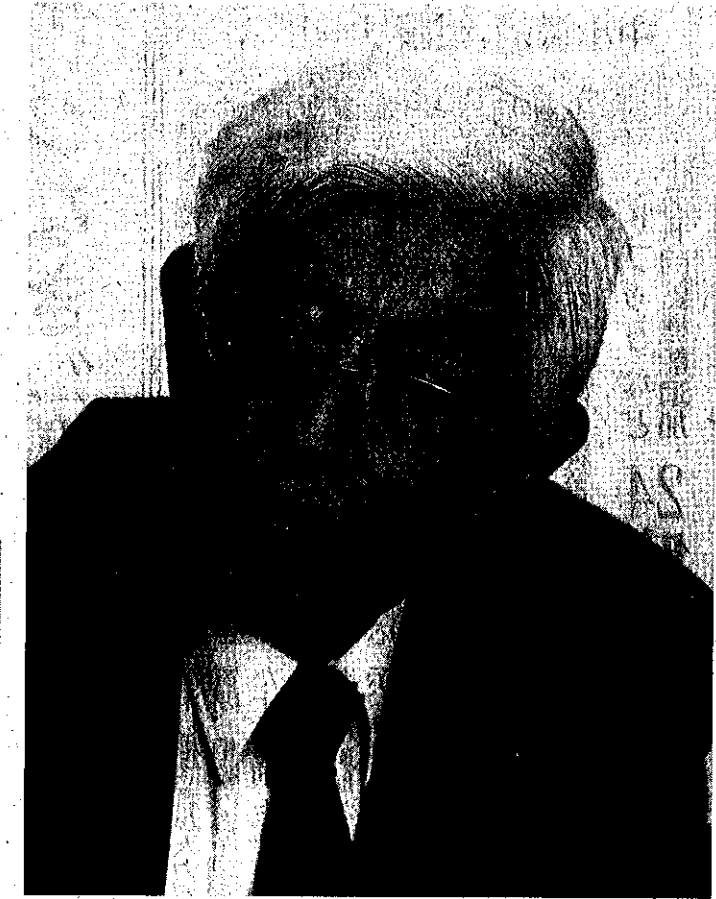


# 『生物・生命科学大図鑑』

## 子どもたちの好奇心育む

（西村書店 03・3239・7671）



にしやま とおる  
**西山 徹氏**

バイオ未来  
キッズ理事長

65年（昭40）東京大学農学部農芸化学科卒、味の素入社。研究開発業務に従事し、アミノ酸・ヌクレオチドの工業生産、大豆の微生物酵素による分解などに取り組む。取締役中央研究所長、副社長などを経て、2011年よりNPO法人バイオ未来キッズ理事長。東京都出身、78歳。

「次々に読み進んで行きたくなる構成ですね。」

「細菌から植物まで、動物、細胞と遺伝、ヒトの生物学と健康、環境の科学、という5部構成で生物科学の全分野を網羅している。生物全体が有機的につながっているという、知識の根本が理解できるのでは。実験や観察の具体例がちりばめられているし、各章冒頭には現在活躍する科学者へのインタビューを掲載し、科学の道を志すきっかけや、新たな取り組みについて聞いている。そうしているうちに1000ページにおよぶ大部を楽しく読み続けることができる。」

「第1部が『生命とは何か』という問いに始まり、生物の分類の意義や大切さに続く。なぜ科学者は分類するのか。こうした構成が、科学の本質を学ぶ興味を呼び起してくれるはずだ。」

「NPO法人の皆さんで日本語版作成に取り組んだんですね。」

「企業でバイオに取り組んでいたり、生物学を教えるなどしている27人で構成されている。味の素の研究所に在籍していた頃、科学技術の発展に結びつきそうなアイデアは本当にたくさんあった。ベンチャーを興して取り組むべきかという意見もあったが、ポランディアでやってみようという意見が一致した。2011年にNPO法人がスタートし、バイオの専門家が集まり、未来を子どもたち（キッズ）に託そう、という思いで子どもたちの好奇心を育む活動を続けている。」

「日本の教科書は個別の知識が断片的に羅列され、ややもすると詰め込みの暗記物、といった印象になりがち。これでは理科が好きになりにくい。それに対して米国のものは結論だけでなく、そこに至った思考の流れを論理的な手順を踏んで考えさせられる。これはそのまま科学教育の違いにもつながっているのではないかと。また、執筆者の目線が子どもの側にあるのにも平明だ。日本語版を作るのに際して、そうした点にも留意した。過去の知識を学ぶだけでなく、これから役に立つ知恵が身につけられる。」

「どんな読者を想定しているのでしょうか。」

「もちろん日本の中学生が読めば生物への理解が進むし、教師にとっても論理的な教え方の参考になるだろう。高校生、文系の大学生には教養として役立つだろうし、日常的に理科を必要としないような社会人にも優れた読み物となる。」

（名取貴）